

平成 28 年 4 月 1 日（金）15：20～16：50

新任教員 FD 研修

「信州大学で充実した教育・研究生活を送っていただくために」

＜本日のプログラム＞

1. 信州大学の教育について

理事（教学担当）・高等教育研究センター長 平野吉直

2. 高等教育研究センターによる教育・研究のサポート

2－1. 高等教育研究センターの紹介（副センター長 加藤鉦三）

研究支援と教育支援

教学関連の第三期中期計画

2－2. 各担当紹介（センター専任教員 李 敏・矢部 正之・加藤 善子・加藤 鉦三）

※配布資料一覧は裏面にあります。

＜配布資料リスト＞

● 1つ目のポケット

◆ プログラム

◆ 高等教育研究センターのあらまし/FDのご案内

● 2つ目のポケット

◆ 資料 No.1-1 高等教育研究センター教員の職掌のご紹介

◆ 資料 No.1-2 高等教育研究センターの WEB サイトへの案内

◆ 高等教育研究センターNewsLetter

● 3つ目のポケット

◆ 資料 No.2 授業アンケートの全学共通項目について

◆ 資料 No.3 シラバスガイドラインの改定について

◆ 資料 No.4 「新入生調査 2013 年（JFS2013 信州大学）」報告書

● 4つ目のポケット 3

◆ 資料 No.5 国立大学法人信州大学教員業績評価・給与査定制度（全学教育機構基準） 抜粋【平成 27 年度参考】

● 5つ目のポケット

◆ 4月18日（月）新任教員向け eALPS 研修会について（通知）

● 6つ目のポケット

◆ アンケート

矢部 正之 (YABE, Masayuki) とは、何者？



- ⇒ 元々の専門は、原子核物理（核反応理論）
- ⇒ 医学部にもいました（保健科学と物理学・人間工学）
- ⇒ 高等教育での専門分野は、高等教育における ICT（情報通信技術）の活用

このような経験から、現在の研究課題・関心事は、次のようなことです。興味のある方は、いつでも声をかけてください。（メールは、yabe@shinshu-u.ac.jp）

★学修支援システム【e-Learning センターと共に】

- ⇔ LMS（学習管理システム）や電子ポートフォリオの活用とその効果
- ⇔ モバイル（携帯・スマートフォンやタブレット）を利用した双方向性促進
- ⇔ 画像（動画）の活用（遠隔授業，e-Learning，反転授業）

★教育ビッグデータ（評価・分析とそれに基づく施策提言）

- ⇔ 学修支援システムからのデータ収集
- ⇔ IR（ Institutional Research ）への活用

★地域との連携【高等教育コンソーシアム信州と共に】

- ⇔ 大学間連携の推進（教育・人材育成，地方創生）



**利用可能な様々な資源を効果的に利用し
教育に活かす！**

加藤善子（かとう・よしこ）
katoy@shinshu-u.ac.jp

私の専門領域は、**初年次教育**です。

全学のFD（特にアクティブ・ラーニング推進や、学生を勉強させる授業デザインなどのFDとコンサルティング）、信大版の初年次セミナー「**大学生基礎力ゼミ**」の**運営支援、学習支援プログラムの体制構築**（現在は主にライティング支援）、の3つが主な業務です。

…そして会議にたくさん出ています。こんなに毎日何時間も座っていたら、〇になってしまうのではないかとマジで心配した時期がありました（笑）。

初年次教育は、

みんなでやろう！

励ましあって元気にやろう！

知恵を出し合ってやろう！

がキーコンセプトです。学生のやる気が最も強い入学直後に、学生と正面から向き合って学生の努力と能力を引き出せる、とてもやりがいのある仕事です。仲間が多いとはまだまだ言えませんが、みんなががんばっています。先生方におかれましても、

学生にもうすこしががんばって勉強してほしい！

授業の効果を下げずに、授業準備に使っている時間を研究（や家族サービス）にまわしたい！

学生同士で学びあえるような課題をつくりたい！

でもレポートは（コピペせずに）一人で真面目にとりくんでほしい！

といったご要望がございましたら、お気軽にお声かけください。先生のティーチング・スタイルを聞かせていただきながら、無理のないソリューションをご提案させていただきます。先生方の研究・教育生活のパートナーとして、末永くお付き合いください。



神戸市出身／お笑いではツッコミ担当、でも余裕で天然ボケです／阪神タイガースファン。兄貴、頼んまっせ！巨人ファンの先生でもFDしに行きますのでご安心を／大河ドラマ好き／草間彌生ファン。数か月に1度は松本市美術館でエネルギーをチャージします／好きな作家は、笠井潔と綾辻行人と大江健三郎と三島由紀夫。／週に2日は10キロ歩き、月に1度は海を見に行くのが楽しみ。

高等教育研究センターのご紹介



副センター長 加藤 鉦三

■当センターの研究支援

科研費申請書の書き方支援、教育実践研究の共同研究、論文執筆支援など

■当センターの教育支援

各種 FD 活動、授業やシラバスに関するコンサルテーション、e-Learning の活用、学生調査データのフィードバック、教育方法や学生との接し方などのワークショップなど

■教学関連の中期計画

- ・信州大学の教育の特徴：「ふれあいの大学」
- ・個々の授業で達成感を得る ⇒ 「成長できた」という実感を持って卒業していく
 - ※資料 「授業アンケート 全学共通項目とその説明」
 - センターニュース「普通の授業で小さな『成長』をねらう」

■加藤鉦三の仕事をご紹介

「高等教育コンソーシアム信州」のコンセプト

長野県の大学・短大を卒業した学生は、
現場で勝手に成長する術（すべ）を知っている

普通の授業で、目的とその達成を意識させる

普通の授業で、自分の成長をふりかえらせる

小さな成長を重ね、自己効力感を持って卒業する

学校時代は勉強のしかたを学ぶとき。

本当に勉強が必要なのは仕事を持つてから。

自己効力感を持つ人は**努力すれば自分を成長させることができる**

ことを知っている

↑

これを普通の授業でやりたい

高等教育研究センターWeb サイトへの行き方

1) 信州大学のホームページから検索バーを使用する方法

○検索キーワード「高等教育」を入力



○サイト内検索結果の最初に表示される



2) 信州大学ホームページからリンクをたどる方法

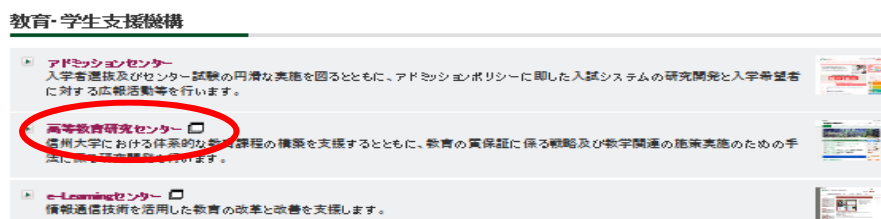
- 「教育研究施設」をクリック



- 「教育・学生支援機構」をクリック



- 下方にスクロール



高等教育研究センター

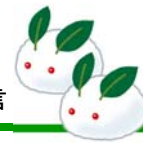
Research Center for Higher Education

Newsletter

No.029

2016.2

- 普通の授業で小さな『成長』をねらう
- お知らせ
- 活動報告
- スタッフから一言



信州大学 | 高等教育研究センター

普通の授業で小さな『成長』をねらう

大学人の喜びって？



研究者の喜びとは何でしょうか。知りたかったことが分かる、誰も見つけていなかったことを見つける、誰も説明できなかった現象を説明する、といったところでしょうか。いろいろあり得るかとは思いますが、「私にとって研究者の喜びとはこれだ」と、比較的容易に言えるのではないのでしょうか。また、結果が出ているか出ていないかも、比較的容易に言えるのではないのでしょうか。

一方、大学教員にとってもう一つの仕事である教育についてはどうでしょう。教育者の喜びとは何でしょうか。こちらの方は、指導者と弟子という個人的なつながりの中で、たとえば「配属された時には西も東も分からなかったこの子が、小さいながらもそれなりの成果を出して卒論を書くまでになっている」といったような『成長』を確認できた時、というようなものでしたら、私たち大学人の肌で実感できるところでしょう。これこそ教育の醍醐味というものでしょう。



実はもったいない

それでは、一般の授業ではどうでしょうか。大学人が教育面で最も時間を費やすのは授業でしょう。そういう授業で、もし実感できる喜びがないとしたら、それはとてももったいないことなのではないのでしょうか。もったいない、と言うよりは、意識されてこなかった、と言うべきかもしれません。上のように、私たち大学人は、「学生を持つ」という状況では『成長』を普通に意識しますが、「授業をする」という状況では、『成長』ということ意識しない方が普通でしょう。それはどうしてでしょうか。ひとつには、「教育には時間がかかる」という事実があげられましょう。「学生を持つ」という状況では一人の学生を数年見続けます。一方、一つの授業は1セメスター4か月しかありません。しかも対象は「学生を持つ」よりもはるかに多いのが普通です。こういう状況では、『成長』ということ意識しない方がむしろ自然でしょう。しかし、改めて考えてみると、勤務時間中、教育面で最大の時間占有率を持つ「授業」で『学生の成長を目撃する』という教育の醍醐味を味わえないとしたら、それはやはりもったいないことです。

採点基準というもの



ところで、「成績評価の厳格化」が求められ始めてもう随分になります。この「厳格化」は、「点を厳しくつける」という意味ではなく、「採点基準に厳格に従って点をつける」というものであると理解されています。ということは、採点基準がはっきりしていなければ、成績評価の厳格化は論理的に不可能である、ということになります。

採点基準に厳格に従って点をつける、ということは、点をつけられる受講生の立場から見ると、授業における自分の学習成果を採点基準が求めるところから従って積み上げていく、ということになりますが、もし採点基準がはっきりしていないとすれば、受講生はどこに向かってどのような努力をすればいいのかが分かりません。このように、採点基準がはっきりしている、ということは、受講生の都合から言っても強く求められるところということになります。

授業でも『成長』



反対に、もし採点基準がはっきりしていたら、受講生はどこに向かって努力すればいいのかが分かります。『シラバス・ガイドライン』で、授業の目標を「〇〇ができるようになる」という形にすることを推奨していますが、そのねらいは、授業の目標と採点基準を同じ形に一本化することで、受講生がどこに向かって努力をすればいいのかをより分かりやすくする、というものでした。「〇〇ができるようになる」は、授業目標であり同時に採点基準でもあります。受講生は「〇〇ができるようになる」ために努力をし、教員は「〇〇ができるようになったかどうかで成績をつけます。受講生にとっては、「可」以上の成績をもらったということは、努力目標であった「〇〇ができるようになる」がクリアできていることについて担当教員の保証をもらったことになります。

平成28年度から『授業改善アンケート』が『授業アンケート』となり、その中には次の質問項目が入ります。

「この授業が掲げた目標に、あなたは到達しましたか」
「あなたは、この授業の一連の経験を通して、達成感を得ましたか」

これは、「あなたは自分の努力によって一山越えたと言えますか」、「そこに達成感を感じていますか」、という二つのことを聞いています。この二つに肯定的に答えるとい

うことは、受講生は、

「適切な努力によって自分はその課題をクリアでき、

それによって達成感を得ることができた」

と言えるということになります。それは小さな成功であり、教員によってそれが成功であることを保証してもらうことで、小さな自信となりましょう。その自信は「自己効力感」として自分の中に定着します。このプロセスは、小さいものではあっても、『成長』に他なりません。このように、卒論指導のような長期に渡る個人指導でなくても、一つの授業で『成長』を目撃することは、十分現実的な行動目標と言えるのではないのでしょうか。

全部の授業でこのような筋書きが可能であるわけではな

いかかもしれません。しかし、多くの授業でこのような『成長』をねらっているのではないのでしょうか。これを積み重ねていけば、信州大学は途方もなく強い教育力を持った大学になります。また、こういう小さな『成長』をいくつも経験できた学生は、自己効力感を持った社会人として活躍していけるでしょう。ある政策課題がある時、「文科省が求めているから」「委員会で決まったので」という理由では、現場がやる気になるはずがありません。しかし、「そういうねらいがあるなら、それはやっただ方が自分の得になるし、何より受講生の得になる」という理解が浸透すれば、その政策課題は間違いなく推進されるでしょう。当高等教育研究センターはその浸透を本気でねらっています。

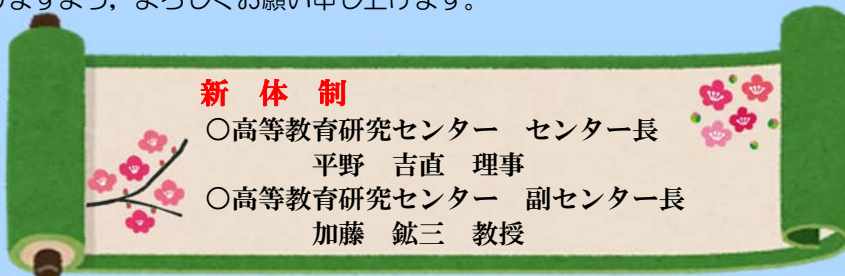
(文責：加藤鉦三)

お知らせ



10月から高等教育研究センターの体制が新たに変わりました。

10月から、高等教育研究センターのセンター長並びに副センター長が交代することとなりました。新体制のもと、ますますの発展に努めて参りますので、今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



平野 吉直 高等教育研究センター長

活動報告

2015年度シリーズFD「反転授業」を実施しました。



FDの様子（講師の向後先生）

11月10日（火）、平成27年度FDシリーズの一環として、「『反転授業』に関するFD」が開催され、早稲田大学人間科学学術院 向後千春教授を講師にお迎えしました。今回のFDでは、大人数でのグループワークの設計方法やテキストの制作方法等、様々な教育のテクニックを御紹介いただきました。信州大学松本キャンパス SUNS大会議室を主会場とし、各キャンパス・高等教育コンソーシアム信州加盟大学にも遠隔配信を行って、計69名の教職員が参加しました。開催後のアンケートでは、「日頃のグループワークのやり方について、今後の参考となる方法があり、大変勉強になった」などの意見が寄せられ、大変有意義なFDとなりました。

なお、同シリーズFDは現在オンラインにて受講が可能です。詳細は、下記のアドレスにアクセスしてご覧ください。

★<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/fd/2015/12/16493.php>

★★ご来場いただきました皆様、ご参加ありがとうございました★★

スタッフからひとこと



平成27年4月に富山大学から転勤して参りました学務課長大野です。早10ヶ月が過ぎます。国立大学全体では約50の大学において、本学と同様に高等教育研究センター（名称はいろいろあります。）が設置されています。学務課には2室、2グループがあります。教務グループが本センターの事務を担当していますので、何でもご相談ください。

さて、冬の信州は富山より寒いと聞いていましたが、既にそのことを感じています。これからの時期、何かと忙しくなりますので、皆様におかれましては健康に注意しつつ業務に従事されますように。

（学務部学務課長 大野昭彦）



信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

高等教育研究センター

■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

■TEL：0263-37-2427（担当：学務部学務課教務グループ）

■MAIL：campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp

■URL：http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/

授業アンケート 全学共通項目とその説明

- ・この授業が掲げた目標に、あなたは到達しましたか。

ねらい： 学修成果の指標として全学で数値を取る

- ・学習を進める上で、シラバスは役に立ちましたか。

ねらい： シラバスを強く意識させる

- ・内容を理解する上で適切な授業外学習が課されましたか。

ねらい： 学修習慣を確立し、能動的な学修姿勢につなげる

- ・この授業のために、あなたは一週間あたりどのくらい授業外で学習しましたか。

1. 30分未満
2. 30分以上 1時間未満
3. 1時間以上 2時間未満
4. 2時間以上 3時間未満
5. 3時間以上

ねらい： 科目ごとの学習時間の数値を全学で取る

- ・この授業に対するあなた態度は良かったですか（欠席をしない、課題等を期限内に提出する、私語・居眠りをしない、質問をするなど、積極的に受講しましたか）。

ねらい： 学びには自分の努力が前提となることを学生に強く意識させる

- ・あなたは、この授業の一連の経験を通して、達成感を得ましたか。

ねらい： （「満足度」ではなく）個々の授業での達成感を聞き、大学全体の教育成果の指標とする

自由記述

- ・この授業を受けて、あなたができるようになったことや学んだことを書いてください。
- ・この授業を受けて、あなたにとってもっとも価値があったもの・ことを書いてください。

二つの自由記述のねらい：

学生が自分自身の学びをポジティブにふりかえるという作業になる

それを読んだ教員がやりがいや達成感を得ることができるものになる

信州大学シラバスガイドラインの見直しについて

【※下線部（赤字）が現シラバスガイドラインからの変更点】

このガイドラインは、信州大学で開講されるすべての授業のシラバスが備えるべき必須条件である。ただし、下記に記載する事柄をシラバスにおいて具体的にどのように表記するかについては、各学部学科の専門教育課程及び共通教育課程（以下、各学部）によって異なってくるため、より具体的な「シラバス作成の手引き」のようなものは、必要に応じて各学部において作成するものとする。

大学並びに各学部・学科等の定める『学位授与の方針』は、それぞれの教育課程の卒業生が卒業時に確実に身に付けていることが求められる能力・知識のリストであり、個々の授業は、学生が、大学並びに各学部・学科の『学位授与の方針』の能力・知識を身に付けるために配置されている。したがって、個々の授業が『学位授与の方針』のどの部分をどういう形で担っているのかをシラバスで明らかにするものとする。

『学位授与の方針』で定める能力・知識は、授業等を通して、学生が自分の努力によって手に入れるべきものである。シラバスでは、課題や小試験の内容と回数等、当該授業が担う『学位授与の方針』に至るまでに学生がしなければならないことを、学生が明確に理解できるように記述するものとする。特に、事前・事後学習のしかたについては、「受講生には、1単位当たり「45時間から授業時間を引いた時間量（下記の例参照）」の自主学習時間が課せられている」という『単位制度の実質化』の考え方に立ち、授業目標到達に向けて学生が何をしなければならないかを明確にする。その上で、それらが成績評価においてどのように扱われるのか、配点等を明らかにするものとする。

以上の考え方に立ち、以下の6項目を信州大学の授業のシラバスの必須記述項目とする。なお、シラバス作成に先立つ授業設計に当たっては、当該授業のカリキュラムの中での位置づけ・他の授業との関連を意識するものとする。

①授業の基本的な情報

授業名、担当者氏名、教室、開講日時（何曜日何時限目）、単位数、教科書、参考書。その他、各学部の必要に応じて記載する。

②授業が担う大学並びに学部・学科等の『学位授与の方針』の項目と、授業の達成目標

授業の達成目標は、この授業が担う『学位授与の方針』の項目をこの授業の言葉で言い換えたものとし、（知識面、スキル面、態度面の組み合わせで、またはいずれかの面で）「○○ができるようになる」という形を標準とする。

③成績評価の方法

受講者が②の達成目標に到達するために通っていく過程（課題や小試験等）と、到達したことを示すエビデンス（最終レポートや期末試験等）のそれぞれの内容と配点を記述する。

④成績評価の基準

この項では、「何ができているれば、授業の達成目標の水準から見て『卓越している』／『かなり上にある』／『やや上にある』／『その水準にある』と言えるのかを記述する。

筆記試験の場合の例：

授業で示した例題と同レベルの問題が解ければ「水準にある」、応用問題が解ければ「やや上にある」、やや難しい応用問題が解ければ「かなり上にある」、例題からは難しい応用問題が解ければ「卓越している」

レポートの場合の例：

(i) 問題の設定が適切であり、(ii) その問題の背景を説明できており、(iii) その問題にどのような課題があるのかを指摘できており、(iv) それらの課題に対して既存の学説が提示する解決法を適切に把握できており、(v) その上で自分の見解を提示できており、かつ、教員を感心させるレベルにあれば「卓越している」。(i) から (v) の 5 項目を満たしていれば「かなり上にある」。4 項目までできていれば「やや上にある」。3 項目までできていれば「水準にある」。

⑤事前・事後学習に関する情報

「受講生には、1 単位当たり『45 時間から授業時間を引いた時間量』の自主学習時間が課せられている」という『単位制度の実質化』の考え方に立ち、15 回の授業に対して受講生がしなければならない予習・復習も授業の一部であるものとして、その授業での事前・事後の自主学習に関する計画を記述する。

⑥授業計画

15 回の授業のおよその内容と順番、課される課題や小試験等のスケジュールを記述する。課題については、提出締切も示す。評価のための最終試験を行う場合は、15 回の授業とは別に行う。

⑦履修上の注意

当該の授業での教科書や参考書の利用方法、注意事項など

⑧オフィスアワー及び授業担当者の連絡先

【参考 1】

「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成する」ため、必要な自主学習時間は次のようになる。

例 1：週 1 回の授業で 1 単位の授業（45 時間の学修が必要）

授業時間 30 時間（2 時間×15 回）、自習学習時間 15 時間（1 時間×15 回）

例 2：週 1 回の授業で 2 単位の授業（90 時間の学修が必要）

授業時間 30 時間（2 時間×15 回）、自習学習時間 60 時間（4 時間×15 回）

【参考 2】

評定については次の評価基準を基本としている。

- 秀： 授業の達成目標の水準から見て卓越している
- 優： 授業の達成目標の水準よりかなり上にある
- 良： 授業の達成目標の水準よりやや上にある
- 可： 授業の達成目標の水準にある
- 不可 (D)： 授業の達成目標の水準よりやや下にある
- 不可 (F)： 授業の達成目標の水準にない

【参考 3】

「事前・事後学習に関する情報」では、例えば次のような趣旨の内容を書き込んでください。もちろん授業形態によりそれぞれの授業で事情が違いますので、現実的なやり方を一つもしくは二つ程度お書きください。

例

- ・「毎回の授業内容の欄に、教科書や副読本で予習しておくべき個所を指定する。」という趣旨をここで書いておいて、15 回の授業内容の欄に、教科書や副読本で予習しておくべき個所を指定しておく。
- ・「前週の授業内容の理解を問う毎回小テストを授業冒頭に行う。それに備えるためのワークシートを毎回配布するので、それを使って授業内容を毎回復習してから授業に臨むこと。」という趣旨を書く。
- ・「毎回リーディング課題を課す。授業開始直後にその理解を問う小テストを行うので、それに備えて課題をしっかりと読み込んでから授業に臨むこと。」という趣旨を書く。
- ・「毎回の授業の最後に、次の回につながる課題を出す。その課題はそれまでの授業内容を使えば答えを出せるようになっている。グループワークで使うので、必ず答えを作り印刷して持ってくる。それはグループワーク後に回収する。」という趣旨を書く。
- ・「毎回、授業終了後に予復習のためのワークを eALPS にアップする。それは次回の授業で回収するので、自分で印刷して持参すること。」という趣旨を書く。
- ・「毎回、授業後に内容確認の小テストを eALPS でアップする。受講生はそれに解答し、さらに自分が選んだ選択肢について、どうしてそれが正しい選択肢であるのかを隣の席の受講生に口頭で説明できるようにしておくことが求められる。」という趣旨を書く。

教員業績評価に係る自己申告書様式(2015年度:高等教育研究センター)

学部等名: 高等教育研究センター

職名:

氏名:

分野	教育	研究	社会活動	大学運営	計
重み設定					0.0

【注意】

当該年度(教育, 社会活動, 大学運営は平成25年度と26年度, 研究は平成22年度から26年度の5年間)の全ての業績を申告してください。

ただし, 科研費申請及びSOAR更新は, 27年度を適用します。

科研費申請済, 継続及び資格停止申請済は, 枠内に「1」を, ない場合は「0」を入力

H28.11.1~H27.10.31でSOAR更新済は, 枠内に「1」を, ない場合は「0」を入力

I:教育 対象期間:H25年度~H26年度(2013年4月~2015年3月)

審査項目	学士 or 修士 or 博士	前期 or 後期 or 通年	授業分担割合(～1)	授業科目名	コマ数	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
H25年度授業科目								
H26年度授業科目								
H25年度授業以外の教育実績	教育活動内容		貢献度 大・普通・小	担当教員数	活動期間・時間等 (and/or 対象学生数)	自己申告点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
				人				
				人				
H26年度授業以外の教育実績	教育活動内容		貢献度 大・普通・小	担当教員数	活動期間・時間等 (and/or 対象学生数)	自己申告点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
				人				
				人				
教育の質－目標達成事項 H25年度からH26年度にかけて, 大学院, 学部, 全学教育の教育目標を実現するために, 各授業科目につき, どのような努力を行い, どのような成果を挙げることができたか, 下記(A)～(C)のうち成果を挙げたものを3授業科目挙げ, それぞれの授業ごとに証拠に基づいて述べ, そのために取り組んだ授業実践を記述する。 (A)授業に対する学生の授業参加度(出席・遅刻・早退などの改善, 居眠り・私語・内職などの改善, 集中力・発言・グループワーク参加などの向上, 予習・復習の増加, 課題提出率の向上など) (B)一学期の授業の結果としての学生の知識・思考・技術の深まりや修得の程度(レポートの質の向上, 成績の向上, 単位取得率の向上(＝途中放棄率の減少)など) (C)学生の満足度(授業アンケート結果, それ以外の学生からのフィードバックなど) ≪上限18点≫	担当科目名	受講者数	目標達成項目	取り組んだ授業実践の内容		自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
			(A)授業参加度					
			(B)修得の程度					
			(C)満足度					
			(A)授業参加度					
			(B)修得の程度					
			(C)満足度					
			(A)授業参加度					
			(B)修得の程度					
			(C)満足度					
教育の質－FD項目 H25年度からH26年度にかけて, 大学院, 学部, 全学教育の授業改善を達成するために, どのような努力を行い, どのような成果を挙げることができたか(ピアレビュー等の活動内容は日時・参加人数等をできるだけ明確に記述すること。 (A)学内・学外のFD活動への参加, 企画・運営 (B)教育関係の学会などへの参加・発表 (C)ピアレビュー(レビューワーとレビューイー双方が参加する①事前打ち合わせ, ②授業レビュー, ③事後フィードバック・省察を含む) (D)その他(個人的なコンサルテーション申し込み, 関係図書の参照, 同僚との懇談など) ≪上限10点≫	左記(A)～(D)のFD項目	場所・日時や期間	具体的な取り組み内容		自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
教育の質－その他参考特記事項 ≪上限28点≫								
教育分野						計	0.00	0.00

Ⅱ：研究 対象期間：H22年度～H26年度（2010年4月～2015年3月）														
審査項目		著書名		共著の場合の分担者数	担当頁数	刊行先	刊行年月	自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点				
著書 (専門研究書)	著書(専門研究書)－単著													
	編共著(専門研究書)－編者													
	編共著(専門研究書)－共著													
	研究教育関連教科書等－単著													
	研究教育関連教科書等－編者													
	研究教育関連教科書等－共著													
審査項目		論文名		共著の場合の分担者数	担当頁数	掲載雑誌名	刊行年月	自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点				
論文	論文(専門研究論文)－単著													
	論文(専門研究論文)－共著													
	しかるべき評価又は権威ある機関等の査読を経た論文(専門研究論文)－単著(2倍算定)													
	著しい評価又は権威ある機関等の査読を経た論文(専門研究論文)－単著(3倍算定)													
	しかるべき評価又は権威ある機関等の査読を経た論文(専門研究論文)－共著(2倍算定)													
	著しい評価又は権威ある機関等の査読を経た論文(専門研究論文)－共著(3倍算定)													
審査項目		発表名等		国際の場合は「国際」国内の場合は「内」と記入	単著 or 共著	会議名	会議場所	会議年月	自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点			
会議・学会発表等	会議・学会における招待講演													
	研究発表・症例報告													
	共同発表													
その他学術・研究活動・貢献等	研究者受入	研究者名	国籍	受入期間	受入月数				自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点			
	科研費申請(単独・共同)	研究種目	研究課題			申請年度			自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点			
	科研費採択(単独)	研究種目	研究課題	分科細目番号	分担者数	交付年度	交付額(万円)		自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点			
	科研費採択(共同)													
	科研費採択(共同かつ研究代表者)													
	その他研究費採択(単独)	交付機関等名	研究課題	相当する分科細目番号	分担者数	交付年度	交付額(万円)		自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点			
	その他研究費採択(共同)													
	その他研究費採択(共同かつ研究代表者)													
	寄附金	H22年度受入金額(万円)	万円											
		H23年度受入金額(万円)	万円											
		H24年度受入金額(万円)	万円											
H25年度受入金額(万円)		万円												
H26年度受入金額(万円)		万円												
特許	H22年度出願件数	件												
	H23年度出願件数	件												
	H24年度出願件数	件												
	H25年度出願件数	件												
	H26年度出願件数	件												
	H22年度取得件数	件												
	H23年度取得件数	件												
	H24年度取得件数	件												
研究の質－上記各項目から漏れたり十分評価されないもの及び強調したい研究成果について、特記事項として、客観的根拠を示して記述(少なくとも1件、最大3件)														
								研究分野	計	0.00		0.00		

Ⅲ:社会活動 対象期間: H25年度～H26年度(2013年4月～2015年3月)

審査項目		学会等名	役職名	役職就任期間	対象期間 就任月数	自己算 定 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点
学会等	学会運営活動(学会長・代表)							
	学会運営活動(その他役員)							
	学会運営活動(学会誌編集委員)							
	学会運営活動(大会実行委員長)							
	学会運営活動(大会実行委員)							
	地方部会・研究会運営活動(部会長・代表)							
	地方部会・研究会運営活動(その他役員)							
	地方部会・研究会運営活動(会誌等編集委員)							
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員長)							
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員)							
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員)							
政府等審議会等	審議会等名	役職名	役職就任期間	対象期間 就任月数	自己算 定 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
	中央行政機関審議会(会長)							
	中央行政機関審議会(委員)							
	都道府県行政機関審議会(会長)							
	都道府県行政機関審議会(委員)							
	市町村行政機関審議会(会長)							
	市町村行政機関審議会(委員)							
大学外の公的試験の出題・採点・面接等の考試委員の業務 ※大学入試センター教科科目第一委員会、司法試験委員その他これに準ずる者の委員名の秘匿期間を経過した直後の年度で、その業務活動を算定する。	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
省庁等が公募する特別な事業(JSTからの事業公募の審査、科学研究費補助金)の考試委員の業務 ※委員名の秘匿期間を経過した直後の年度で、その業務活動を算定する。	連携活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
	連携活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
地域連携・産学官連携	講演・講義題目等	時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
	講演・講義題目等	時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
地域連携・産学官連携に伴う講演・講義等(出前講座等)	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
国際交流活動	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点		
その他社会活動	種別	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
	種別	活動内容	活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
社会活動分野					計	0.00		0.00

Ⅳ:大学運営 対象期間: H25年度～H26年度(2013年4月～2015年3月)

審査項目	役職名	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
役職等								
全学委員会	委員会等名	委員長、委員等種別	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	
	委員会等名	委員長、委員等種別	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	
センター内委員会	委員会等名	委員長、委員等種別	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	
	委員会等名	委員長、委員等種別	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	
センター規程に掲げられている業務に関し、I(教育)からⅢ(社会貢献)の分野で直接評価できない業務について、その取組状況及び成果を自己申告(具体的成果を客観的に記述してください。)								
大学運営分野					計	0.00		0.00

	教育	研究	社会活動	大学運営	科研費申請	SOAR	部局長調整	計
審査点(加重前)	0.0	0.0	0.0	0.0	G13確認	O13確認	—	0.0
審査点(加重後)					G13確認	O13確認		0.0

平成28年 4月 1日

平成28年度新任教員 各位

e-Learning センター長
高等教育研究センター長 平野 吉直

新任教員向け eALPS 研修会について（通知）

下記のとおり、新任教員向けに「eALPS 研修会」を開催いたします。本研修会は、これまで e-Learning センターが実施してまいりました信州大学全学教育基盤システム「eALPS」（授業支援 Web システム）の講習会等を、高等教育研究センターと共同で実施する FD と位置付け、新任教員向けに、教育における情報通信技術（ICT）の活用能力を高めていただく目的で実施するものです。

つきましては、ご多忙の折とは存じますが是非ともご参加いただければ幸いに存じます。ご参加される方はお手数ですが、4月11日（月）までに e-Learning センターにメールでご連絡ください。

記

日 時： 平成28年4月18日（月）3限（13時00分～14時30分）

4限（14時40分～16時10分）

※同じ内容で2度行いますので、どちらか都合の良い方にご参加ください。

場 所： 松本キャンパス SUNS 会議室（主会場）

※以下のとおり SUNS 配信を行いますので、各地学部から遠隔参加も可能です。

教育学部：SUNS 会議室 工学部：SUNS 会議室

農学部：SUNS 会議室 繊維学部：SUNS 会議室

対 象： 新任教員 および 初めて eALPS をお使いの方

内 容： eALPS の機能と活用事例を紹介し、実際に授業のコースにログインして体験していただきます。個別相談にも対応いたします。

※無線 LAN に接続可能なノートパソコンをご用意いただき、人事より発行されている 業務用 ID とパスワードを忘れずに控えてきてください。

講 師： 矢部 正之（高等教育研究センター・e-Learning センター）

東原 義訓（e-Learning センター）

谷塚 光典（e-Learning センター）

新村 正明（e-Learning センター）

長谷川 理（e-Learning センター）

なお、本講習会の出席者には、「FD 参加証」が交付されます。

本件事務連絡先

学務課教務グループ 細川・佐伯

電 話：0263-37-2427（内線）811-7165

e-Learning センター 早水・内山

電 話：026-238-4247（内線）831-4247

e-mail：elearning@shinshu-u.ac.jp